

1万2千年の旅

清水・桃井・今川の歴史を扱った「荻窪の記憶IV」展では、近世にまで遡って原野の開拓にはじまる歴史に光を当てました。では、そもそも、荻窪地域に人が住み始めたのは、いったい、いつ頃のことだったのでしょうか。灯台下暗し、答えは当センターの足元にあります。センターの建設に伴う発掘調査で大量の石器が発見され、「川南遺跡」と名づけられた遺跡は今から約1万2千年前の旧石器時代のもので判ったからです。また、大正末の土地区画整理の際、荻窪に住む考古学者が縄文時代の竪穴住居跡や大量の土器を発見したことは、パネル展や冊子でも紹介したとおりです。

このように、荻窪地域には、早くから人が住んでいたわけですが、それには善福寺川の恩恵がありました。文化人類学者の中沢新一は、「(神田川や善福寺川は)いまよりずっと立派な川で、その川岸にはいくつもの人間の住む村がつくられていた(『アースダイバー』)」と書いています。おそらく、毎年、東京湾から大量のサケも上ってきたことでしょう。水と豊富な食料を求めて人間が集まり、集落が生れていたのです。

時代が下ると、善福寺川の流域には、川の水を引いた水田が拓かれます。なかでも、荻外荘の南に広がっていた田端田んぼは、隣接する成宗田んぼとともに、杉並区でもっとも広い田んぼでした。その田んぼを見下ろす高台にある田端神社は、田の端にあることからその名がついたといわれ、創建は室町時代とされていますから、当時、すでに水田が拓かれていたものと思われます。

のちに「荻外荘」となる屋敷を善福寺川の左岸に建てた入澤達吉は、「家の中から居ながらにして田植えも見える」と、田ん

ぼの景観を愛し、開発から守るため水田を購入し、小作に出していました。また、角川書店の創業者・角川源義も、田んぼが一望できることから荻外荘に連なる高台に邸宅(幻戯山房)を建てましたが、せっかくの眺望を楽しむことはほとんどできませんでした。

田端田んぼを埋めて、6.3ヘクタールに及ぶ広大な「荻窪団地」を建設する工事がはじまったからです。埋め立てに使う土は、折から建設が進められていた地下鉄丸の内線の工事が出た土。その土を運ぶ大型トラックが荻窪の町をひっきりなしに通ったといいます。総戸数411戸の団地は、昭和33年に完成。「当時、最先端の高級賃貸住宅として人気を集めた」といいます。しかし、わずか半世紀後、団地は早くも老醜を晒したのち取り壊され、敷地の半分はスマートな「シャレール荻窪」になり、残りはマンションになっています。

「神田川や善福寺川は、不思議ともとの流れの位置の記憶を保存し続けてきた(同上)」と中沢新一はいいます。コンクリートの床を流れる川は、1万2千年にわたる人間とのつき合いをどのように振り返るのでしょうか。

「荻窪の記憶」プロジェクト 松井和男

